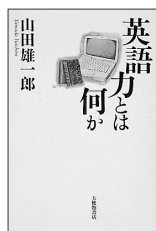


英語力とは何か

山田 雄一郎 著

大谷泰照

(大阪大学名誉教授)



ここでいう「英語力」とは、英語の国際的な力などとは区別して、学習者がもつ英語の力の謂である。

英語教育は、いうまでもなく「英語力」の向上を目指す。ところがわが国の英語教育は、まことに不思議なことに、この肝心の「英語力」の問題について、正面切って論じることが、これまでほとんどなかったといつてよい。つまり、「英語力」の正体も定かでないままに、ただひたすら「英語力」の向上が叫ばれてきた。

本書は、こんな「英語力」の曖昧さを糺し、それに一定の理論的枠組みをあたえることによって、日本人の英語教育の新しい方向を指し示そうとする。

「英語力」は、従来、英語の単独の能力と考えられがちであったが、著者はその考え方をとらない。バイリンガルの言語能力を説明するためには、われわれの母語である日本語を通して形成された言語能力が、第二言語としての英語の発達と無関係ではないと考えざるを得ないからである。それは、いわゆる母語干渉をみれば納得がいく。

著者は、「英語力」とは、英語の4技能（英語形式の運用能力）に加えて、その背後にあり、母語を通して形成され、英語にも転化し得る言語能力（共通基底能力）、そしてそれらの中間に位置する言語の変換装置（変換能力）の3能力の3層構造と考える。

こうみると、従来のこの国の英語教育の関心が、いかに英語形式の運用能力に偏り、他の2つの重要な能力が顧みられていなかったがよくわかる。プロの教師たるもの、自分の教えるものの正体は当然知っているべきところ、「英語力」については、それができていないというのである。この指摘、文字通り、頂門の一針というべきではないか。

英語感覚が身につく 実践的指導

——コアとチャンクの活用法

田中茂範／佐藤芳明／

阿部 一 著

山賀淑雄

(新潟県教育庁高等学校教育課

企画振興係指導主事)



本書は認知的スタンスに基づき、「コア図式」と「チャンキング」という概念を用いながら、英語の語彙と文法を扱い、今後の英語教育の指導法に大きな指針を与えている。語彙については、第1、2章でコアの概念を用いて、基本動詞と前置詞の意味を分析している。辞書では通例、1つの語について複数の語義が列記されているが、コア理論ではそのすべてを統一的に説明する記述や図式が用いられる。この理論を使えば、例えばtakeなどの多義語を教える際に、本書で提唱されているようなLC-カードを提示することにより、語の全体像を把握させることができる。また前置詞の多義性も、日本人には習得の難しい分野の1つであるが、これもコア図式が有効に働く。初期の学習者であっても、onやatなどの前置詞の全体像は比較的容易に理解できるだろう。

第3章では語彙の意味(コア)から文法現象を説明する新しい教育英文法を提案している。例えばhaveは最も基本的な語の1つであるが、意味の多義性に加え、使役や受益、さらに現在完了にも用いられ、学習が進むにつれて困難さが増す。これらを筆者はHAVE空間という図式を用いて統一的に説明している。学習者はこの説明で動詞haveの本質が理解できるはずである。第4、5章ではチャンキング理論に基づいて、会話の文法性を取り上げ、英語を実践的に学ぶ方策を提案している。チャンキングの概念そのものについて初めて触れる読者も、読み進むにつれて、教育現場におけるその有用性の大きさを理解できるだろう。本書では他にも様々な学習上のアイディアが盛り込まれている。英語という言葉の本質を理解し、また英語教育に新たな展望を開く上でも大変有益な1冊である。